

# 国語科書写のあり方を考える 一言語活動の充実を目指してー

林朝子（三重大学教育学部）

大村政茂（三重大学教育学部附属中学校）

## 1. はじめに

平成 20 年版中学校学習指導要領（以下、H20 指導要領）においては、言語活動の充実が掲げられ、書写としても言語活動の充実を目指した指導内容が求められている。

H20 指導要領「総則」では「各教科等の指導に当たっては、生徒の思考力、判断力、表現力等をはぐくむ観点から、基礎的・基本的な知識及び技能の活動を図る学習活動を重視するとともに、言語に対する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え、生徒の言語活動を充実すること。」と述べられており、その中核的な役割が国語科での言語活動であるとされている。この H20 指導要領改訂に向けて出された、中央教育審議会答申における国語科改善の基本方針には、「音声、文字、語彙、単語、文及び文章の構成、言葉遣い、書写などについては、実際の言語活動において有機的にはたらくよう、関連する領域の内容に位置づけるとともに、必要に応じてまとめて取り上げるようにする。（下線は筆者による）」という改善のための具体的な内容が示されている。

しかし、書写として言語活動の充実への関わり方が十分積極的ななされているとは言えないのが現状であろう。そこで、筆者らは国語科における言語活動としての書写を目指し、三重大学教育学部附属中学校（以下、附中）1 年生を対象に実践を行った。本稿では、実践参加者である中学 1 年生へのアンケート結果を基に本実践の有効性を明らかにし、言語活動の充実に関わる書写のあり方を提案したい。

## 2. 書写の現状と本実践の位置づけ

1. で見たように、現行の書写教育では言語活動の充実に十分寄与できているとは言い難く、むしろ書写としての意義や役割について

の見直しや改善が依然としてなされていない状態であろう。

書写には 2 種類の孤立感があると考えられる。一つ目は「国語科の中での孤立感」であり、二つ目は「書写の中での孤立感」である。

まず、「国語科の中での孤立感」について見ていく。

松本 (2009) は「国語科の中で書写指導はますます孤立感を深め」と述べている。書写が文字指導の〈形〉〈音〉〈意味〉の三つの要素のうち〈形〉を主な指導内容にしていることと、毛筆という非日常的な筆記具の使用により、書写の授業が「取り立てて行」われ、「授業として常に独立したスタイルをとっていることが、書写を殻の中に閉じこめ、国語科としての関わりを見えづらいものにする誘因となって」おり、「孤立感」が深まるとしている<sup>1)</sup>。

次に、「書写の中での孤立感」であるが、この場合の孤立感は、書写の枠組みの中での子ども同士の関係性が非常に薄く、個々の作業を行うに留まっている状態を意味している。松本 (2009) は、「「手本をみながら毛筆練習をし清書して終わる」というような自己完結型の授業が多く行われているように見受けられ」と述べているように、個々が練習をし、作品を作り上げるという書写の多くの授業方法がこの孤立感に大きく影響している。また、書写の場合、硬筆や毛筆によって書かれた文字を結果として見る事が多く、書かれた文字に対して子ども同士での見比べがなされることがあり、書字に対する得手不得手によってさらに子どもたちの孤立感を強めてしまうことがある。林 (2011) でも、特に毛筆の場合は、非日常的な筆記具のため「学外での学習経験の無いところから生ずる劣等感や意欲減退」が書写の授業に対するイメージとして確認できた<sup>2)</sup>。

これら 2 つの孤立感を持つ書写の殻を破るために必要なものとして、松本 (2009) では「相手意識」と「目的意識」を挙げており、この 2 つの意識が今後の書写指導を考える上でのキーワードであると述べている。「相手意識」とは「読み手に配慮して読みやすい文字を書く」とする意識であり、「目的意識」とは「目的に応じて最適の書き方を選択して書く」とする意識である。読み手である「相手」を意識し、「相手」に伝えるために適した文字を書く「目的」が明確になることで、書字の過程において生徒自身が積極的に関わることになるだろう。

さらに、相手と目的の意識を強く持たせ、言語活動の充実を図るためには、国語科の「聞く・話す」「読む」「書く」とも関連させることが必要であると考えた。

そこで、本実践では、「生徒が俳句を作り（書く）、「相手」と「目的」を意識しながら文字を書き（書写）、お互いに鑑賞する（読む・聞く・話す）」という、書写を中心とした一連の活動を設定した。「自分の俳句を皆に文字で伝える」という、書く内容と文字が深く結びついている活動である。

### 3. 実践概要

実践の流れは以下である。＊は活動での実践担当者を示す。

対象者：附中 1 年生 137 名

単元名：俳句を詠もう

めあて：自詠俳句を短冊に小筆で書き、鑑賞する

使用教科書：『中学校書写』学校図書

実践期間：2015 年 10 月～12 月

活動内容：

- |                                       |       |
|---------------------------------------|-------|
| 1) 10 月～11 月：小筆による仮名練習（教科書 pp. 20-21） |       |
| 俳句作成（自作教材）                            | ＊大村担当 |
| 2) 12 月 3 日・10 日：俳句を短冊に書く             | ＊林担当  |
| 3) 12 月：俳句短冊鑑賞・アンケート収集                | ＊大村担当 |

1) では、短冊で書字する文字は楷書であるため、楷書に適した平仮名を取り上げた。また、生徒には、練習の段階から常にめあてを伝え、何のための小筆練習であるのかを意識させた。また、俳句作成では、小学校で「伝統的な言語文化」として俳句を学んでいるため、まず俳句の特徴を思い起こさせた。それから、松尾芭蕉の「古池や蛙飛び込む水の音」を学習し、句切れの働きと、色や音のイメージの重要性について学ばせた。その後、これは川柳ではあるが、「寝ていても団扇の動く親心」を学習し、視点についても学ばせた。このように、定型や季語、句切れといった基本の事項と、視点・イメージという俳句のポイントを授業したうえで、書写で短冊に書くという前提で句



作の課題に取り組ませた。

2) では、「15 分導入→20 分練習→10 分短冊清書」という流れで、各クラスで活動を実施した。導入では、平仮名の柔らかい線質やそのための運筆の特徴を考えさせたり、実際に林や大学生の自詠と書字による短冊を見せながら、文字の大きさ、配列、名前の場所などについて説明を行った。短冊という限られた紙面に対して、文字の大きさ、文字間や行間をどうするかを考えさせるよう工夫した<sup>3)</sup>。練習では短冊と同じ大きさの紙を準備した。短冊は、松葉に薄い青・緑・紫・桃・橙の雲がかかった金粉散らしのものを一人 1 枚配布した。名前は、名のみ書き、その下や横に「翠」の印を後日林が押した。

1)2)の際は、4人グループで向かい合わせに座って活動を行った。お互いに書いている様子を見たり俳句を読み合ったりし、作品を作り上げたり、書字をする過程をお互いに共有できるようにするためである。

3) は、廊下に生徒の作品を全て掲示し、自由に鑑賞するようにした。時間を決めた鑑賞ではなく、学校生活という日常の中で友達の作品を見たり、その作品についてお互いに話をすることが、国語力におけるコミュニケーションにつながると考えたためである。アンケートは各自が持ち帰り、記入後に提出させた。アンケートでは次の4点について、自由記述での回答を求めた。

- ①新しく知ったことやわかったこと
- ②自分の俳句を短冊に書いて感じたことや思ったこと
- ③友達の作品を見て感じたことや思ったこと
- ④その他

#### 4. アンケート結果と考察

では、アンケートの回答を基に、生徒らがどのような気づきがあったのか、また、本実践により、書写が「孤立感」から抜け出し、また、言語活動の充実を目指した国語科書写としてのあり方ができているのかを見ていく。なお、[ ]内の数字はコメント数、斜体文字はアンケートでの生徒のコメントを示す。

##### 4-1. 書写の学習内容への気づきや再認識

主に①の回答から、書写の学習内容への気づきや改めて認識し直している様子が見ええた。

### 【平仮名と漢字】

まず、文字の特徴 [43]、書字 [43]、大きさ [42] についてのコメントが挙げられた。

文字の特徴では、漢字と比べて平仮名の丸みや柔らかさ等、文字全体からの感じる印象についてのコメントが多く見られた。

- ・平仮名はいつも書いたりしていますが、書道で書く平仮名は、いつも書いているようなのがった字ではなく、丸みをおびていて漢字とは少し違うことが分かりました。
- ・平仮名は漢字と違ってカクカクしすぎても丸っぽすぎてもだめなんだということがわかった。

書字についても、漢字と比べてのコメントが多く、実際の筆の運び等、具体的な内容が多くを占めた。平仮名の始筆の際の筆圧、結びの形についてのコメントが目立ち、改めて平仮名の文字としての特徴を表現するための書字方法についての気づきがあったようである。

- ・ひらがなすべてに共通することがいろいろあっておもしろかった。
- ・漢字とひらがなでも、はらいなどが少し違う。筆の入り方のちがいや力のちがいをしることができた。
- ・筆の入り方で漢字を書くのか平仮名を書くのかわかるということ。
- ・ひらがなは入りをやわらかくすること。「よ」の結びは細く、「す」の結びは三角形にしたほうがいいなどの結び方を初めて知った。
- ・平仮名は漢字からできているけれど、漢字とは全く別の特徴を持っていること。漢字とそもそもの書き方が違うこと。
- ・一見簡単そうに見えてかなり難しいのが「ひらがな」だと改めて痛感しました。

また、単に書字の方法だけではなく、書く際の気持ちも影響すると述べているコメントもあった。

- ・ひらがなを書くのは手だけじゃないと思った。例えば「か」だと、心が痛

く荒いと「か（注：アンケートではカタカナのカのような文字が書かれている）」のようになってしまうけど、穏やかだと「か」とうまく書けた。

大きさについては、文字の特徴にも含むことができるが、[42] のコメントが見られ、別項目で取り上げることとした。

・平仮名と漢字の大きさは、今まで同じぐらいの大きさでかいていたけど、本当は平仮名を少し小さくして書くとバランスの良い字がかけるということがわかった。

・字の大きさが変わるだけで俳句の印象も変わってしまうことがわかった。

このように、平仮名と漢字の比較を通して、文字の特徴や運筆方法等がより鮮明に把握できたようである。

### 【配置・字間】

名前の書き方 [20]、配置 [16]、字間 [3] が挙げられた。

名前の書き方は短冊の「どこに名を書くのか」という点でのコメントである。配置については、作品の見た目に影響が大きいいため、練習の際にもいくつかの配置パターンで試し書きしている生徒もいた。

・文字の配置によって、印象かがかわること。

・字の大きさや行の分け方などで、見た目が大きく変わってくることを知りました。

・文字のサイズやどこに書くかで、作品に大きな影響を与えることがわかりました。

### 【用具・用材】

小筆 [9]、短冊 [9] が挙げられられた。

まず、小筆についてでは、名前を書く以外での使用がほとんどないため、小筆の基本的な使い方を知らない生徒もいた。大筆では意識がしやすい弾力を、平仮名・漢字によって始筆や曲がり等を書く際の筆圧に変化をつけることを通して、実感できているコメントもあった。

・筆を立てるとよりいっそうきれいに書ける。

- ・小筆の書きやすい持ち方がわかった。
- ・筆の弾力を感じた。

また、小筆については、④その他においても、[10] のコメントが見られた。小筆で名前以外の文字を書く機会がほとんどなく、小筆による書字に戸惑いつつも、小筆での表現の幅に気づく機会になったようである。

- ・小筆を使用するときは、自分の学年や名前を書くだけだった
- ・小筆で慣れない中、一字一字ゆっくりていねいにできたと思う。
- ・小筆は思うようには上手に使えないことがわかった。
- ・細筆を使つての書写をしっかりとしたのは初めてだった。
- ・普段、あまり小筆で何かを書くことはなかったので、難しかったけど楽しかった。
- ・小筆なりの良さを知れたので良かった。

短冊については、紙の質感に不慣れであり書きにくいというコメントも見られたが、短冊に俳句を書く際の紙面の使用についてのコメントがほとんどであった。

- ・短冊いっぱいを使わず上下左右少し空けておく。

### 【俳句作成】

俳句作成は[12] 挙げられた。俳句についての学習は小学校 3 年生・4 年生でも触れられている<sup>4)</sup> が、実際に 5・7・5 の文字数に季語を含めて俳句を作ったことある生徒は少なかった。そのため、俳句で取り上げる内容や語彙選びに時間がかかったようであるが、楽しさやおもしろさを感じたようである。

- ・限られた語数の中で季節の情景等を考えるのは少し難しかったけど楽しかった。
- ・5、7、5 の決まりごとは前から知っていたけど、季重なりのことははじめて知りました。歳時記で調べてみてたくさんの季語ありびっくりしました。「季語があつておもしろいな」と感じました。

### 【作品作りを通して】

自身で俳句を作り、それを短冊に書字するという流れ全体についてのコメントも見られ、文字が自己表現にもなることや文字の美しさについて感じ取れている生徒もいた [5]。

・小筆でも、字を大きく書いて、自分を表現することで、自分らしくなってよかったです。

・日本語ってきれい。毛筆で書かれた日本語の漢字とか平仮名が美しい。

・一度きりの作品をまとめることの難しさがよくわかりました。

・俳句を一つ書くだけに、季語のこと、バランス、表現など、いろいろなことを考えて書かなくてはいけないんだということを知りました。

## 4-2. 短冊作品の創作

②「自分の俳句を短冊に書いて感じたことや思ったこと」の記述を大きく【緊張感】【困難点・改善点】【満足感・達成感】の3つの項目に分けた。【緊張感】[46]、【困難点・改善点】[75]、【満足感・達成感】[59]であった。

### 【緊張感】

短冊の紙は一人1枚しか使えず、かなり緊張した様子で最後の清書に取り組んでいた。短冊清書までの練習の成果を出したいという気持ちが強く、結果的に緊張が増してしまったコメントも見られた。

・すごく緊張して手が震えた。

・緊張しすぎて最後の文字が小さくなってしまった。

・一回勝負ということですからすごく緊張して、ひらがなののに漢字と同じくらいの大きさになってしまった。

### 【困難点・改善点】

短冊に書字する際の文字の大きさや配置など、各自が注意しようとしたがうまく表現できなかった点が困難点や改善点として多く挙げられていた。

・短冊に書く字の大きさに注意しないといけないのでそこが難しかった。名前



の位置にも気をつけないといけなかった。

・下に行くにつれて文字が小さくなってしまったので、そこを注意したいです。

・堂々と書くことができなかったのが、今回の反省点です。

・斜めにかいてしまったり、上と下の字の大きさが違ったりした。

### 【満足感・達成感】

【緊張感】【困難点・改善点】を挙げている生徒が多かったが、同時に【満足感・達成感】についても記述している生徒が多かった。作品に対しての何らかの不満を抱いてはいるが、自分の作品に対しての満足感や達成感を少なからず感じている。

・少し左にずれてしまったけど、自分的には名前までしっかりできたと思う。

・紙が違って少し書きにくい感じがありましたが、今までのものに比べていいものになったと思いました。

・美しい丸みとはねやとめが最初に比べて良くなった。

・文字が斜めにずれてしまって、残念でした。でも、一線一線に集中して書けたので良かったと思います。

・みんなと比べると汚かったけど自分で評価をつけるとしたらけっこうがんばったほうだと思いました。

自身の作品に対して、自分が努力した点を客観的に見ることができており、中には一画一画を書いていく過程について触れているコメントも見られた。

自身の短冊の文字や書字過程に対して、【困難点・改善点】【満足感・達成感】が見られた。【困難点・改善点】については、読み手である「相手」と、相手に読んでもらう「目的」意識が前提にあるからこそ、各自が文字や書字に関して、漠然とではなく、具体的な観点での評価がされていると言えるだろう。また、具体的な観点で文字や書字を評価できるようになったことで、同時に【満足感・達成感】も感じられている。自身の書字や文字の良い点や向上点を把握している様子があり、文字や書字に対して明確な視点での「自己肯定感」が生まれていることがうかがえる。

#### 4-3. 俳句の鑑賞

ここでは、③「友達の作品を見て感じたことや思ったこと」の記述を見ていく。大きく【個性】【俳句】【文字】の3つの項目に分けた。

【個性】[57]、【俳句】[77]、【文字】[99]であった。

##### 【個性】

【個性】に含めたものは、「個性」という表現以外に、「それぞれ」「みんな違う」「色々ある」等、「個々」を認めている表現を全て含めた。対象は、俳句の内容についてのものもあれば、文字の様子について述べているものもあった。

- ・それぞれ、性格や個性が出ている俳句で、おもしろいと思った。
- ・人それぞれ季語や表現が違いその人の個性があふれる句がたくさんありました。
- ・お手本を見ながらも、自分の個性を出そうとしている。
- ・元気な字もあればおとなしそうな整った字もあるし、個性が出るものだなと思った。
- ・一人ずつの字の大きさなどが違い、個性が表れてるな—と思った。
- ・みんなの作品は人それぞれの字や個性があって何度見ても飽きずおもしろかった。

これらのコメントから、生徒の中に「個性」を認め、受け入れる態勢が自然とできていると考えられる。2. で述べた「相手」を意識する際、あまりに相手を意識しすぎてしまい、自分自身を隠してしまう場合があるが、生徒らのコメントのように「個性」として受け止め合える環境の中であれば、「相手」を意識しつつ、自分自身を前面に出せる素地が整っているといえるだろう。

では、「俳句」や「文字」について、具体的にどのような「個性」を感じていたのかを見ていきたい。

##### 【俳句】

俳句については、季節や季語、語彙の選び方など、俳句としての表現方法に関するコメントが多く見られた。友達の想像力や言葉遣い

に驚いている様子や俳句から伝わってくる意味やイメージそのものを楽しんでいる様子がうかがえる。

- ・冬の詩が多いなと思ったけど、みんな思っている冬に違いが表れていた。
- ・みんな景色や情景が違っていた。
- ・みんな全然違う言葉や意味を表していたので驚いた。
- ・それぞれの俳句から思っていることがしっかりと伝わってきて何度読んでもおもしろいと思いました。
- ・自分では思いつきもしなかったようなおもしろい詩を書いている人もいて、自分にはない視点から見ることができました。
- ・Aさんの少しおもしろみがある俳句や、Bさんの共感する部分のある俳句、Cさんの何かにたとえたような俳句があつて、見ていて楽しかった。
- ・花火という言葉が書いていないのに、花火が伝わってきた。

限られた文字数や季語を入れるという制限のある表現方法ではあるが、決して同じような内容や表現ではないことを改めて気づき、人それぞれの感受性の深さを再認識していると言えるだろう。

## 【文字】

文字についてのコメントは[99]と多くの生徒が記述していた。書写の授業での活動であり、小筆で短冊への書字という活動内容であったため、文字へのコメントが多くなったのであろう。

- ・漢字とひらがなのちがいが分かれていてよいと思った。
- ・作品のとめやはらいなどが全然ちがい、36人の作品を並べると、とてもおもしろかった。
- ・俳句に合わせて、字の太さを変えたりしている人がいたのすごかった。
- ・文字の太さや俳句の位置のバランスがよかった。
- ・紙は縦に書くのが苦手で、まがる癖があるけど、みんなまっすぐに書けていてすごいなと思った。
- ・ぼくは「夏」っていう字がずれてしまったのですが、みんなずれることなく書けていて真似してみたいし、気を付けたいと思う。
- ・名前の位置や配列が人それぞれで色々あつておもしろかった。
- ・みんなそれぞれ文字の位置や大きさ、太さが違って、見ていてあきない。
- ・Dさんの漢字が多くてとてもかっこいいなと思いました。
- ・他のクラスだけど、Eさんの「・・・」という俳句が漢字がほとんどでひら

がな1文字だけというのが面白かったです。

文字に関しては、漢字と平仮名の違いや運筆、配置についてのコメントが多く、基本点画の細かな書き方まで見ている生徒もいた。また、太さに関するコメントもいくつか挙げられた。シャープペンシルやペン等のように太さにあまり変化が出ない筆記具とは違い、筆という太さが自由に変えられる筆記具による書字ならではのコメントであろう。

【俳句】に関しても「見ていて／読んでいて、楽しい／あきない」というコメントがあったが、文字そのものについても「見ていて／読んでいて、楽しい／あきない」というコメントが見られた。【個性】でも触れたように、文字そのものについても人それぞれであることを楽しんでいる様子がうかがえる。2. で記したように、書写、特に毛筆の場合、子どもたちには「学外での学習経験の無いところから生ずる劣等感や意欲減退」の様子が多く見られるが、今回の【文字】に対するコメントのように、「文字」そのものについても、書字の学びを踏まえた上での人それぞれの表現の差であり、それを良しとする姿勢は今後の書写で必要とされる文字に対する姿勢であろう。久米(1989)でも「書く」動作には「常に個人差がつきまとう。結果として表現差(字形差)が生じる。(中略)それらを画一化することよりも、各個性なりにバランスよく書きこなすようにしていくことが大切なのである。」としているが、俳句作品の鑑賞を通して、生徒たち自身が書字の学びが前提にある各個人の「表現差(字形差)」であることを認識していたといえるであろう。

#### 4-4. 感想等

④その他の自由記述を見ていく。全員の回答は得られず、コメント数は99である。中でも、【書写・書字への意欲】[22]、【俳句への意欲】[10]、【小筆】[13]であった。

##### 【今後への意欲—書写・書字】

書写や書字について、今後も学んだ内容を生かしていきたい、さらに自分の字をよりよくしていきたいという前向きなコメントが見ら



れた。

- ・仮名はこれから使う機会がたくさんあると思います。上手になれるように練習をしたいと思いました。
- ・今回は初めてでうまくいかなかったけどとても楽しく毛筆をできたので、次回はもっとうまく書けるように練習したいです。
- ・字をきれいに書くというほうを集中していたので、字のバランスの意義があまりなかったの、そこも意識してよりきれいな字を書けるようにしたいです。
- ・冬休み練習したいと思った。
- ・この経験を忘れないでこれからも頑張りたい。
- ・この授業で改めて発見したことなどを生かし、次に役立てたいと思いました。一つ一つのポイントを意識することは、字を書く上で大事だと思うのでそこをおろそかにせずにしっかり書きたいなと思いました。
- ・文字の大きさを変えてもっと味のある漢字にして書きたいなと思いました。
- ・書写(毛筆)はあまりうまくないけど楽しいと思えた。
- ・グループで書くことで「あ、それおもしろい」「きれいだね」とか楽しみながらかけたので、習字が嫌いだったのが少し好きになったかもしれないのでよかったです。

3. で触れたように、書写の活動は練習・短冊作品作りの際は4人グループになり、机を向かい合わせで行った。グループ内で実際お互いの書いている様子や文字について話している様子が見られた。コメントでは一人の生徒が記述したに留まったが、練習や作品作りの過程で文字や俳句について「話す」活動も行われていた。

### 【今後への意欲ー俳句】

俳句作成についても今後も続けていきたいというコメントが見られた。俳句による表現の深さや広がりを感じたり、友達の俳句の発想に影響を受け、さらに俳句作りに挑戦しようとする様子が見られる。

- ・初俳句だったけど、楽しくできた。俳句をこれからも作っていきたい。
- ・俳句をまず考えるというあまり身近ではない作業が楽しかったです。そして、これからも俳句を考えてみようと思いました。
- ・俳句を作るときのルールや他の人の発想を、次に俳句を作るときには生かしたい。

・17 文字の中に情景を入れるのは難しかったです。ですが、それがうまくなると、本当にいろいろなものが表現できて、楽しいと思うので、次また書く機会があれば、少し勉強してからしようと思います。

・今回の俳句を元に新しい俳句のジャンルでまた今度も作れるといいなあ。

## 【小筆】

4-1. の【用具・用材】でも取り上げたが、これまでの書写においては「学年と名前を書くための小筆」という認識で、小筆で様々な文字を書くこと自体が初めての生徒が大部分を占めた。しかし、練習・短冊作品作りを通して、小筆の特徴を把握しながら様々な文字を書き、小筆の楽しさや毛筆そのものの良さを感じられていたようである。

・前より小筆がうまく使えるようになりました。

・普段、あまり小筆で何かを書くことはなかったので、難しかったけど、楽しかった。

・小筆をやってみて、嫌いだった習字が少し好きになりました。

・小筆なりの良さを知れた実感があったのでよかった。

・小筆を使用するときは、自分の学年や名前を書くだけだったので、ひらがなと漢字のバランスや、まっすぐに書くことが難しく、本番でも思ったような字は書けませんでした。今回の経験を生かして、自分の字も上手に書けるようになりたいと思いました。

・小筆は小学生の時から使うのが苦手でしたが、この授業で小筆を使うのが苦手ではなくなりました。

・前より小筆がうまく使えるようになりました。

・小筆を使つての書写をしっかりとしたのは初めてでなかなか扱いづらかったです。

【書写・書字への意欲】【俳句への意欲】【小筆】のコメントから、俳句や小筆という初めてのことへの挑戦を通して、対象そのものへの意欲が高まり、さらに、小筆から毛筆への関心、よりよい書字のための工夫等に広がっており、自ら次の段階の課題や意欲を見出している様子が見られる。

## 5. まとめと今後の課題

本実践では、書写が「孤立感」から抜け出し、「国語科における

言語活動としての書写」を目指すため、「相手意識」と「目的意識」を明確に意識でき、国語科の「聞く・話す」「読む」「書く」とも関連させるため、「自詠俳句を短冊に小筆で書き、鑑賞する」活動を行った。活動を通しての生徒のコメントから、以下の2点が成果として挙げられる。

- (1) 書写の学習内容の理解
- (2) 自己・他者の肯定感

まず、(1) 書写の学習内容の理解については、4. のコメント分析の随所に見られる。「短冊を友達に見てもらう」という相手意識と「見てもらうための文字」という目的意識を捉えやすい活動であることにより、書字や文字を見る観点がより明確になったであろう。生徒らは自分自身の書字や文字に関してだけではなく、他者の書字や文字に対しても適切な観点から客観的に見ることができるようになっている。また、書写の学習内容のポイントが明確になったことで、相手意識と目的意識を持ちながら書字する姿勢が生まれ、今後の書写への意欲へとつながったと考えられる。

次に、(2) 自己・他者の肯定感についてであるが、4-2~3. のコメントを中心に、自己の文字や書字過程への肯定感だけでなく、他者の個性や違いを認める姿勢が明らかに見られる。ここでの個性や違いは、ただ自由で何でもよいとするのではなく、相手や目的を意識した書写の学習を行った上での「表現差」としての個性の違いである点に注目しておきたい。また、表現上の制限のある俳句についても、お互いの語彙使用や事象の捉え方等の違いに驚き、楽しんでいる様子が見られ、俳句の鑑賞を通して自己・他者の肯定感は育まれていたと言えるであろう。自己・他者の肯定感があることによって、「個」を受け入れる環境が作られ、「相手」を意識し、「相手」に伝えるための文字を書く「目的」のための書字の際にも、自分の文字で伝えようとする気持ちが生まれるであろう。

以上の2点が本実践の成果として挙げられる。(1) と (2) は決して独立した成果ではなく、相互に関係し合うものである。書写一書字・文字一を中心とし、各過程での「聞く・話す」「読む」「書く」と

の関連も組み入れた一連の活動の中で、生徒同士の言語活動が活発に行われた結果であろう。

これらの成果を踏まえ、言語活動としての書写のあり方を、本稿では「手書き文字を通し、自己を表現し、他者を認めること」であると提案したい。また、書写を国語科の他領域と関連づけることで、「国語科の中での孤立感」のある書写ではなく、書写が国語科の他領域をつなげる役割を担うる可能性も提示できた。

また、今回の実践は、附中教員と大学教員が連携し、一定の期間をかけて活動を行うことにより、生徒たちも常に文字や書字のことに何らかの意識を向けていたと考えられる。書写での活動は「単発的」な内容になる傾向があるが、本実践は3か月にわたる活動であり、生徒らの日常に書字や文字への意識と共に、生徒同士の「ことば」によるやり取りが様々な形で行われていたと言えるだろう。

ただ、本実践では、生徒同士の「ことば」による様々なやり取りの具体的な内容までは十分な確認ができていない。特に、「聞く・話す」については、俳句作成、小筆練習、短冊作成、短冊鑑賞など、活動に関わる全場面において生徒同士のやり取りが見られた。今後は様々なやり取りの中で、生徒たちが書字や文字、自己や他者に対してどのような意識変化があったのか、詳細に観察する必要があるだろう。今後の課題としたい。

書写は書字の技能的な面にのみ注意が向けられる傾向があるが、技能向上のみに特化する授業展開では、これまでと同様に国語科の中でも孤立し続けるだろう。「文字を書くこと」が言語活動であるという点から書写の活動を組み立てることで、書写教育の充実や国語科での文字の役割を見直す機会となるはずである。

## 注

1) 林が担当している大学の書写書道関連科目においても、書写を小中学校の独立教科として認識している学生も見られる。また、松本（2009）でも指摘されているように、小中学校の時間割にも「書写」と表記されているように、無意識のうちに「書写」が一教科のように扱われている一例であろう。

2) 林（2011）では、大学生に対し小学生の頃に書写に対して抱いていた



気持ちを調査した。中学校書写に対しても、同様の気持ちのまま臨んでいたと考えられる。

3) 平成 20 年版中学校学習指導要領国語第 1 学年〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕(2) の書写に関する指導内容では、「ア 字形を整え、文字の大きさ、配列などについて理解して、楷書で書くこと。」が挙げられている。さらに平成 20 年版中学校学習指導要領解説で詳細を見ると、「紙面全体に対してそれぞれの文字の大きさや書くべき位置を考えて調和的に割り当てること、文字と文字との開け方や行の中心の取り方に注意すること、行と行の間の空け方に注意することなど」と解説されている。

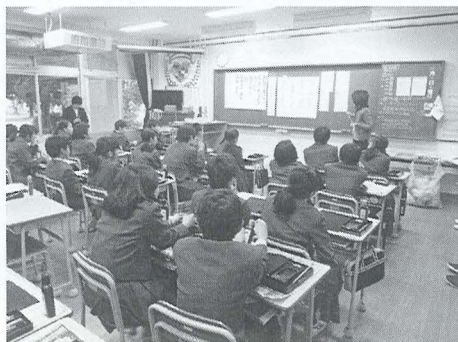
4) 平成 20 年版小学校学習指導要領国語第 3 学年及び第 4 学年〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕「ア 伝統的な言語文化に関する事項」では「(ア) 易しい文語調の短歌や俳句 について、情景を思い浮かべたり、リズムを感じ取りながら音読や暗唱をしたりすること。」という点を重視しての俳句の学習が行われている。

#### 引用参考文献

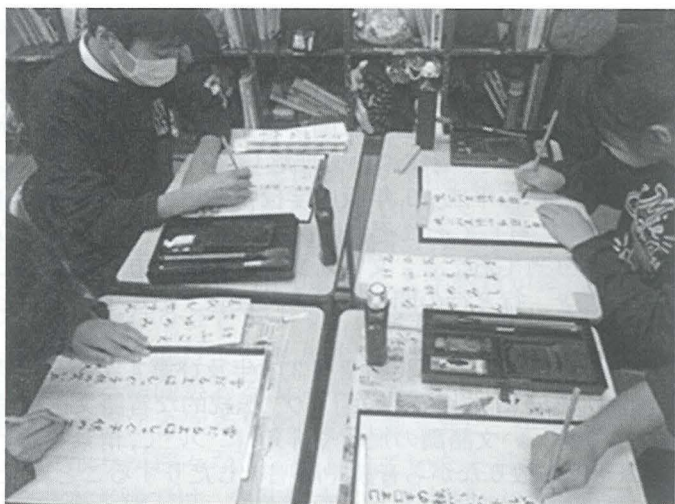
久米公 (1989) 『書写書道教育要説』 荳原書房

林朝子 (2011) 「小学校における“書写”のあり方ー“書写”に対する学生の意識調査からー」『三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』第 31 号

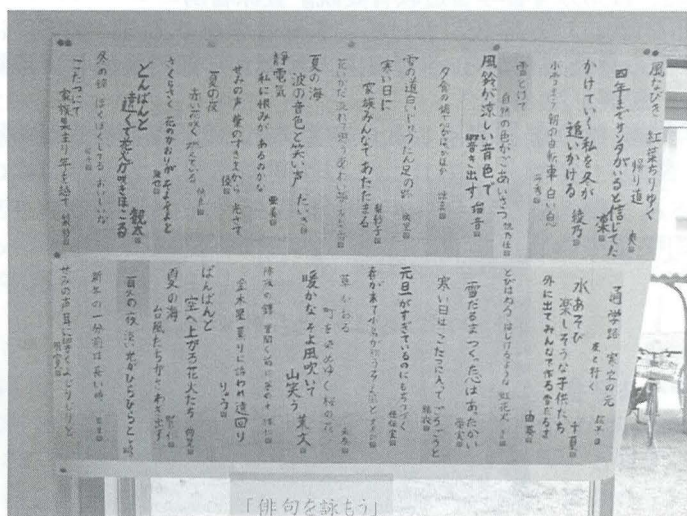
松本仁志 (2009) 『「書くこと」の学びを支える国語科書写の展開』 三省堂



授業の様子 (短冊作成の導入)



短冊の練習



廊下での短冊の掲示